

夫から聞いた戦場の記憶

真木 則子

夫は大正9年生まれで、8人兄弟の四男として育ちました。岡山県で軍人となり、出兵先であるパプアニューギニアや台湾での体験について、のちに私に語ってくれました。

夫は陸軍船舶工兵隊に所属し、図面引きの技術者として設計や船づくりに携わっていました。戦地では食料難に陥り、人肉を食べざるを得なかったことがあったと聞きました。軍人は決して口にしないような内容ですが、短歌サークルにいた元軍医の方が、「人肉を食したこと、生きて帰って来なかった」と短歌で詠んでいたのをきっかけに、夫の体験としても理解することができました。

夫とは晩酌をしながら、ほぼ毎日のように戦争の話をしていました。ある日、夫が「人間の本性は餓鬼だ」と言ったことがあり、その言葉が強く心に残っています。

クラス会で友人から「お前の旦那、人殺したことあるよな」と言われたときは、分かっていたつもりでも大きなショックを受けました。友人は夫との年齢差もあり、軍人として生きた人の感覚を理解しきれない部分があったのだと思います。戦後であれば殺人は罪ですが、当時の夫はきっと複数の命を奪ったのだらうと感じます。それでも、夫も軍友も、自分の行いを語ることはありませんでした。

当時の様子はあまり語らない夫でしたが、捕虜を捕まえたときの話だけはしてくれました。捕虜を捕らえると、仲間や部下を殺された思いが込み上げ、「ただ殺してなるものか」という感情になり、一枚ずつ爪を剥がすなどして苦痛を与えていたそうです。また、夫自身のことではありませんが、各国で捕虜を使って人体実験や毒ガスの実験をしていたなど、虐待の話も聞きました。

パプアニューギニアでは、夫は「生き残り」ではなく「死にそこない」と表現していました。だから「今は余生だ」とも言っていました。「生きて帰ることは恥」のような考え方もあったのかもしれませんが、私には、何よりも部下の命を落としてしまった責

任感から来る言葉だったのだと思えます。

夫は現地でマラリアにかかり、全身麻痺の状態になりました。右半分だけが辛うじて動かしましたが、口も動かなくなりました。軍医は仲間に「指を切れ」と指示したそうです。それは、すでに助からないと見込んで、遺骨や形見として持ち帰るためでした。しかし仲間たちは夫を見捨てず、現地の病院まで運び、民間治療を受けさせてくれました。原住民の生き延びる知恵として、マラリアに効果的だという団子ほどの大きさの幼虫を食べさせられ、そのおかげで生き延びることができたといえます。

軍を引退した後、夫は「これからは核家族が増える時代になる」と考え、素人ながら老人病院を創業しました。夫は 2002 年に癌で亡くなる最期まで、話題はいつも軍友と戦争のことでした。